

中国魏晋南北朝における華北墳墓の編年的分析

戴 俊 英

はじめに

「歴史学において歴史史料の年代決定は必要不可欠の基礎的な問題である。それは個々の歴史史料を詳細に研究し、それによって個々の歴史事象がいかにより明らかにされたとしても、それらの時間的な関係（年代観）が把握されなければ、歴史事象を歴史の知識として体系化する事ができず、個々にバラバラに切り離された歴史の知識からは、歴史の本質を理解する事はできない。その意味で歴史史料を正しく年代決定することは、歴史学を科学として保証する第一歩といえる」（勅使河原彰 1975）

「考古学では、それぞれの遺跡・遺構の年代の決定に力を注いできた。このような「いつ」「どこに」という時間と空間を限定する編年関係をいかにして広域的に樹立していくか、これが考古学の主要な、極言すれば唯一のテーマであった。考古学はもっとも詳細な年代を必要とする学問である」（藤本強 1985）また、「考古学の対象とする資料が、悠久な歴史経過の中に形成されて残存した関係上、時代や時期に区分も必要である。およそ時代区分は研究上の便宜のものであり、歴史事象の変化や文化階梯の発展をある程度示すことは明らかである」（斉藤忠 1982）ことから、編年研究が歴史学・考古学における基礎的研究として、必要不可欠なものであることは論を俟たない。

中国では早くから文献資料が現れることもあって、歴史考古学の占める大きな比重は中国考古学の顕著な特徴である。特に、魏晋南北朝時代には多くの墓誌が墳墓から出土し、墳墓の築造年次が明確になると共に魏晋南北朝期における墳墓の編年に指標として利用されるようになった。

一、華北における墳墓編年研究の現状と課題

考古史料の主体を占める製作物は、遺物であれ、遺構であれ、すべて形態を持つ。その形態の特徴に着目して、種類をわけたり、型式を分類したりする。また、考古資料の形態の相違は、空間的にも、時間的にも生ずる。つまり集団間にも、同じ集団の内にも生ずる（近藤義郎 1986）。ここでは時間的に形成された形態の相違について説明し、次いで変化における時期の持つ意味と、時代設定に伴う問題点を指摘する。

1. 先行研究における華北墳墓の編年

華北地区は洛陽を中心として、河南省、河北省、山東省、山西省等の広い範囲に渡る。魏晋南北朝期の華北地区墳墓について、簡単に回顧して見ると、その時期の墳墓についての研究はまだ十分ではない。

ここでいう編年とは、墓葬の形式的変遷の段階を区分することであり、政治史的区分とは異なるものであることに注意されたい。

第一、「四期説」 まず張小舟氏より提唱され、後に葉驍軍は張説の新たな四期説を出した。

(1) 張小舟説(張 1987) : 中原における墳墓の構造と副葬品の変遷によって、後漢末から五

胡十六国時代まで(2世紀末-5世紀前半)の中原における墓葬を四期に区分した〔文献1〕。

第一期: 後漢献帝の初平元年(190年)から曹魏前期に当たる齊王曹芳の正始年以前

(2世紀末-3世紀30年代)

第二期: 曹魏の後期に当たる正始年間から西晋の泰始年間(3世紀40年代-70年代)

第三期: 西晋の中・晩期である武帝の泰始年以降、西晋の滅亡まで(3世紀70年代-4世紀初)

第四期: 五胡十六国時期(4世紀初-5世紀初)

第一期: I・II型の墓は発見されていないが、III型・IV型-1式・IV型-2式は規模の小さい単室墓である。墓室は長方形で、側壁の中間部分は外弧である。副葬品は、土器に“初平”式罐・蓋付きの鼓腹罐・直口罐・四耳罐・双唇罐・奩・勺・方形象・耳杯・台所の模型・家畜家禽の模型があり、銅製品に変形四葉文鏡・柿蒂文連弧鏡・縦書きで“位至三公”の銘文が入った双夔文鏡・後漢晩期の“四出五銖”銅錢・薄く軽い“董卓”小銅錢がある。

第二期: I型-1式・II型-2式・III型-1式の墳墓が発見された。双室墓について、前室は大体において方形で、後室は長方形である。単室墓は方形である。副葬品は、蓋付きの鼓腹罐・直口罐・四耳罐・双唇罐などがまだ続いているが、“初平罐”は無くなった。そのかわりに円い案・長方形の容れ物・獸首燈・釉陶小罐・武人俑・侍者俑・馬俑が出て来た。

第三期: 墳墓の類型はほぼ全て揃っており、I型・II型-2式・III型・IV型-1式・IV型-2式などの類型の墓が発見された。三期は双室墓が減って、単室墓が主である。副葬品は、蓋付きの鼓腹罐・双唇罐が無くなり、翻口罐・空柱盒・釉陶小罐が出現した。明器は徐々に減り、粗末で、形が小さくなって種類も少ない。牛車と鎮墓獸が増え、牛を中心にして武人俑・鎮墓獸・男女の侍者俑・馬俑などの俑群になっていった。また墓の中には、圭首形か長方形の墓誌が出現した。

第四期: 墓の数は総じて少ない。現在まで、II型-3式・IV型-4式のものしか発見されていない。墓室は土洞または土壙構造であり、第三期との関係ははっきりしない。副葬品は四耳罐・長方形のお菓子容れ物など、数が多く種類も多い。儀仗俑と侍俑が膨大な俑群に組み合わされている。ある墓には鍍金銅馬具セットもある。

(2) 葉驍軍説 (葉 1994)

後漢末から南北朝期 (2世紀末-6世紀後半) の中原 (特に洛陽を中心とした地域) における墳墓を副葬品の変化によって、即ち、標準としての罐・樽・多子盒・窯・男俑・女俑・武人俑・鎮墓獸など八種類の副葬品を指標として中原における墓葬を四期に区分した [文献2]。

第一期：後漢末から西晋の初頭 (3世紀)

第二期：西晋の中・晩期 (3世紀末-4世紀初)

第三期：五胡十六国から北魏の洛陽遷都以前 (4世紀初-5世紀末)

第四期：北魏の洛陽遷都前後から北周の滅亡まで (5世紀末-6世紀中葉)

第一期：男俑は冠を被っている。太い袖の長袍を着て、腰を帯で結んでいる。女俑の髻は“盤髻”であった。武人俑は短袖鎧甲の上着を着ていて、腰を帯で結んでいる。ズボン・乗馬靴で、“深目高鼻大眼”の“胡人”のイメージがある。鎮墓獸は立っている“怪獸”一つである。

第二期：男俑は円帽子 (胡帽) を被って、細い袖の上着とズボンすなわち“胡服”である。女俑の髻、武人俑、鎮墓獸は第一期と同じである。

第三期：男俑は胡帽が引き続いて流行したが、ズボンの幅は太くなりパンタロン状になってきた。女俑は“十字髻”である。武人俑は漢民族のイメージである。鎮墓獸は第一、二期と同じである。

第四期：男俑は小冠、太い袖の長袍、腰を帯で結んでいる。“褒衣博帶”式に再び戻った。女俑は“双小髻”となる。体形は太って背の低いものから細長く“瘦骨清像”となった。武人俑は“披衣武士俑”となった。鎮墓獸は二つのセットがあり、一つは獸面獸体で、一つは人面獸体である。

第二、「二期区分説」この説は劉彦軍氏 (劉 1986) が提唱した。

劉彦軍氏は政治史に準拠して、“北方墓葬” (東北、中原、西北) を五胡十六国時期と北朝時期の二つに時期区分した [文献3]。

第一期：五胡十六国時期 (317年~439年)

その例は遼寧北票北燕馮素弗夫婦墓、遼寧朝陽四座北燕墓、遼寧朝陽後燕崔邁墓である。その構造は竪穴土壙式の石槨木棺墓であり、土壙平面は長方形または台形である。

第二期：北朝時期 (439年~581年)

30例が挙げられており、河南、河北、山西、山東の諸地域にわたっている。まず墓を多室墓・双室墓・単室墓に区分した。

(1) 多室墓：墓室の規模・出土品・墓主身分によってⅠ型とⅡ型に区分した。

Ⅰ型：規模は大きく、磚室墓で、甬道がある。墓室は方形・四壁外凸・穹窿頂 (ドーム) である。副葬品が100点以上あり、墓主は皇族・外戚である。

Ⅱ型：規模は小さく、磚室墓や土壙墓もある。羨道の上に“天井”があり、墓室は長方形・穹窿頂である。副葬品が大体100点以上あり、墓主は地方官僚である。

(2) 双室墓：羨道があり、墓室は方形・四壁外凸・穹窿頂である。墓主は中央と地方の官僚たちである。

(3) 単室墓：平面図によって方形・円形・舟形（横長の台形）の三つに区分した。

a. 方形単室墓は墓室の大きさと墓主身分によって三型に区分した。

b. 円形単室墓：山東臨淄崔氏家族墓である。長く傾斜のある羨道・短い甬道・円形の石室を特色とする墓であり、穹窿頂である。

c. 舟形単室墓：即ち平面形態が横長の台形である単室墓。その例は遼寧營州臨泉戌主劉賢墓。

2. 先行者編年における問題点

張小舟氏の編年は墳墓の構造と副葬品を基にした編年であるが、墳墓の具体的な構造とその変化については明らかにし得ていない。

葉驍軍氏は副葬品の変化に着目し、それによって墳墓の変遷を表現したが、副葬品だけで編年をすることは説得力に欠ける。

劉彦軍氏は王朝によって五胡十六国時期と北朝時期の二つに時期区分したが、五胡十六国時期（317年—439年）の例はわずか三つで、資料が少なく限界がある。北朝時期（439年—581年）の142年間については30基の例をあげ、それらをひとまとめにして分類・考察しているが、東北、河南、河北、山東、山西の各地域での変化や地域性はどうかについては具体性に欠ける。

二、筆者における華北墓葬の編年（時期を区分する）

墳墓は徐々にではあるが、さまざまな形態に変化していく。どんな段階を踏んでどのように変化したか、地域形態と構造及び時期的変遷はどんなものであるか、個々の性格と全体像を捕捉し、その上で当時の人々の思想・意識や行為を探り、変化の持つ意味を検討していきたい。

筆者は先行研究者が研究し、集成した資料を整理・分析し、墳墓構造・平面形態を重視して、墳墓の類型と構造の変化を基準として、魏晋南北朝の華北墳墓を地域別時期別に細分した。

本稿のデータに用いた中国の省の区分は、現在の行政区分であり、当時の地域区分とは多少異なっているので、古代の政治勢力の活動地域範囲及び文化的な共通性によって各省をより小さな地域に区分した上で、時期をも更に細分した。それが巻末の附表である。以下に述べる整理と検討はこの附表に基づくが、附表のデータは前稿〔注1〕を踏襲した上で、さらに整理・修正したものである。

(一) 河南省

これまでの発掘された墳墓について、その類型と構造によって荊州（南陽）と司州（洛陽及びその周辺）と相州（安陽）の三つの地域に細分した。

1. 荊州（南陽）地区

この地域には当該時代の墳墓が10基あり（附表河南省の1-10）、曹魏の晩期（3世紀50年代）から南朝の蕭梁滅亡（557年）までの間、多室・双室・単室墓の墳墓類型がある。また、10基すべて画像石墓であるが、それは当時の荊州（南陽）地区の最大の特徴である。

平面が長方形の墓室が甬道無しで2つ縦に連なっている双室墓はこの地域の特徴であり、6基ある。多室墓が1基、直方凸形の単室墓が2基、長方凸形の単室墓が1基ある。

墳墓構造は斜めに下がる羨道が土築で、甬道の入り口には磚で出来た封壁があり、甬道は素面磚で築き、拱券弧頂で、甬道にはすべて石門があり、石門には扉のあるものが多い。石門に扉がない場合は、煉瓦と石で封じられている。不明のものを除くと羨道の長さはすべて9m以下であり、甬道は3.1mが1基、2-3mが2基、2m以下が5基ある。玄室はすべて直壁で、墓頂は平頂・弧頂（アーチ）・穹窿頂である。平頂は石材を墓頂に敷く。南陽王庄画像石墓〔文献4〕（附表河南省の5）・南陽東関画像石墓〔文献5〕（附表河南省の8）はその例である。弧頂は煉瓦で築く拱券頂である。前弧後平頂とは、前室は磚築の弧頂で、後室は石材の平頂である。南陽邢営画像石墓M1〔文献6〕（附表河南省の1）はその例である。前平後弧頂は、前室が石材の平頂で、後室は磚築の弧頂である。南陽薬材市場画像石墓〔文献7〕（附表河南省の4）はその例である。穹窿頂は煉瓦で四方の壁から墓頂の中心に向けて持ち送り式に積み重ねたものである。その代表例は南陽邢営画像石墓M2〔文献6〕（附表河南省の2）、南陽第2化工廠21号画像石墓〔文献8〕（附表河南省の3）である。

荊州（南陽）地区の画像石墓は、後漢の画像石墓から画像石を採取し、再利用して墓を築いたものである。荊州（南陽）地区画像石墓については前漢の昭・宣帝期に始まり、後漢末には衰退したというのが一般的な見解である（山下志保 1991）。曹魏の晩期（3世紀50年代）から南朝の蕭梁（557年）にかけて、画像石墓を築くことが流行したが、これは本当の意味での画像石墓ではない。「画像石墓」とは名ばかりで、画像石を用いて墓を築いたというのに、配置された画像石が画面の内容構成に合っていないのである。また、画像石を置き方は建築的に正確ではない。墳墓は当時築かれたものであるが、画像石は漢代のものであろうというのが先行研究者に広く認められており、この地域の当時における墳墓造営の事情が窺われる。

但し、鄧県学庄の彩色画像磚墓〔文献9〕（附表河南省の10）は当時新たに築いた墓である。類型は画像石墓と同じで、長方形の墓室が2つ甬道無しで縦に繋がっており、それが、特製の花紋磚と彩繪浮彫画像磚で築かれている。墓室は直壁・弧頂で、玄室には煉瓦で築かれた棺床がある。

2. 司州（洛陽及びその周辺）地区

この地域に墳墓が45基あり、築造時期及び墓室の平面類型と内部構造によって、三期に区分した。

一期：曹魏の正始八年（247年）から西晋の滅亡（317年）まで

二期：北魏孝文帝の太和十二年（488年）から北魏孝明帝の正光五年（524年）まで

三期：北魏孝明帝の孝昌二年（526年）から北朝晩期（6世紀80年代）まで

(1) 一期：曹魏の正始八年（247年）から西晋の滅亡（317年）まで

この時期に26基ある（附表河南省の11-36）。その墳墓類型は多様であり、多室・双室・単室がすべて揃っている。多室墓と双室墓の玄室は長方形が多い。単室墓に長方形と方形の両方の玄室があるが、方形が多い。甬道に石門を築いている。直壁墓が主である。弧頂（アーチ）、前弧後弧、前穹後弧、前穹後穹、穹窿頂などのさまざまな墓頂がある。装飾墓はない。

多室墓が7基、双室墓が7基あり、両方を加えると一期墳墓の54%で、それに対し単室墓は12基あり、一期墳墓の46%にあたる。傾斜のある羨道を持った横穴式の磚室墓で、甬道に石門を築くものが7基あり（附表河南省の11、19、23、25、26、30、35）、玄室は素面磚で築かれている。斜めに下がった羨道付きの横穴式土洞墓は、羨道は土築であるが甬道は素面磚で築き、拱券弧頂で甬道には石門がない。玄室は土壙である。墓壁は26基のうち23基が直壁墓で、残り3基は弧壁墓である。

また、羨道の長さについては、10m以下は8基、10m以上は22基、最長は37.4mである。甬道は2m以下が14基、2m以上が6基あり、最長は2.9mである。煉瓦で棺床を築いたものが2基あるが、祭台を設けた例はない。

ただし、一期（247年-317年）は後漢の伝統葬制を継承しながら、新しい葬制の要素が入っていると見なすことができる。例えば洛陽西晋帝乳母徐美人墓（299年）〔文献10〕（附表河南省の25）はその代表例で、後漢の複雑な多室墓とは違い、単室墓である。羨道は斜めになっており、長さ37.4m・深さ12.2mである。甬道に後漢の伝統的な多列の封門壁があり、3列の封門施設のうち2ヶ所は石で築かれた封門である。また玄室は、後漢の長方形と違って、方形になっている。玄室の長さは5.5m、幅は6mで、規模は小さい。玄室の墓壁も後漢の直壁から弧壁へと変化した。墓頂は後漢に見られる穹窿頂である。

(2) 二期：北魏孝文帝の太和十二年（488年）から北魏孝明帝の正光五年（524年）まで

この時期に7基ある（附表河南省の37-43）。葬制の様相全体が変化してきている。多室・双室・単室墓の三類型が共存している状態から、単室墓に統一されてくる。玄室は長方形から方形になってきた。弧壁墓が一期より大分増えてきて、半分近くになった（7基のうち3基）。墓頂は

穹窿頂が多くなってきた。甬道に石門を築くのは北魏宣武帝元恪景陵（515年）〔文献11〕（附表河南省の41）だけであり、これは高い身分の象徴である。

また、竪穴系横口式の墳墓が出現した。この竪坑は新しい型の墓道施設である。偃師杏園村北魏洛州刺史元睿墓〔文献12〕（附表河南省の42）、洛陽北魏燕州治中从事史侯掌墓〔文献13〕（附表河南省の43）は竪穴系横口式の墳墓で、甬道と玄門は横に開口している。

羨道の長さは10m以上のものが一期より少なくなり（7基のうち2基）、最長は40.6mで、一期のものより長くなっている。甬道は2m以上のものが一期より多く（7基のうち4基）、最長は7.4mである。

（3）三期：北魏孝明帝の孝昌二年（526年）から北朝晩期（6世紀80年代）まで

この時期に12基ある（附表河南省の44-55）。玄室がすべて方凸形単室墓になっている。また、墓壁は直壁が少なくなり（12基のうち5基）、弧壁が多くなった（残りの7基）。墓頂はすべて穹窿頂である。装飾墓は画像石（磚）墓からすべて壁画墓になっている。また、羨道は一般に長く（壊されたものを除くと、10m以下が1基、10m以上が6基）、最長は30mである。甬道は2m以下が6基・2m以上が3基で、最長は7mである。一期の甬道には石で封門が築かれていたが、この時期は少ない。さて、この三期には斜めに下がる羨道に“天井”を設けた墳墓が登場し、それは新たな埋葬制度が出現を意味している。このような羨道に“天井”を有する横穴式の土洞壁画墓が登場したことは、中国古代における埋葬制度の時代を画する大きな変革であり、伝統的な墓とは違った新たなスタイルの誕生は、当時の社会情勢における劇的な変化をしたことを窺わせる。この墓制は後世の隋・唐時代になると盛んに行われようになる。

羨道に“天井”を築いた墳墓5基のうち、洛陽北魏雍州刺史南平王元暉墓（527年）〔文献14〕（附表河南省の46）には長さ3.5m・幅1.25mの“天井”が二つある。偃師杏園村北魏墓M1101〔文献12〕（附表河南省の52）は長さ2m・幅1.15mと長さ3.1m・幅1.15mの“天井”が1つずつある。偃師北魏樂陵太守鎮遠將軍染華墓（526年）〔文献15〕（附表河南省の44）の“天井”は長さ3.1m・幅1.22m・深さ11.6mである。洛陽北魏常山文恭王元邵墓（528年）〔文献16〕（附表河南省の47）にも“天井”が一つあるが、長さとは幅は不明である。洛陽孟津邙山北魏晩期墓M15〔文献17〕（附表河南省の50）の“天井”は長さ4m・幅1m・深さ13.5mである。

壁画墓が3基あり、洛陽北魏驃騎大將軍江陽王元乂墓（526年）〔文献18〕（附表河南省の45）、洛陽北魏雍州刺史南平王元暉墓（527年）、洛陽北魏瀛州刺史王温墓（532年）〔文献19〕（附表河南省の49）などがその例である。江陽王元乂墓の甬道・玄室の壁画は保存状態がよくなく、玄室の天頂の「天象図」しか残されていない。江陽王元乂は、道武帝拓跋珪の玄孫であり、反乱に関与して胡太后に毒殺されたが、夫人は胡太后の妹で、厚葬されている。羨道・甬道は長く、玄室の規模も大きい。南平王元暉墓は玄室の四壁に赤色と白色を塗っており、壁画が描かれていた

と推定される。

王温墓の壁画は墓主の生前の日常生活を再現したものである。墓主と夫人二人が帷屋下に端坐しており、帷屋外の左側では舞姫が舞い、右側では侍女が拱手して立っているという構成である。

3. 相州（安陽）地区

この地域に8基あり(附表河南省の56-63)、築造時期及び墳墓構造の変化によって二期に区分した。

(1) 一期：十六国早期（4世紀初-中葉）

安陽孝民屯鮮卑族墓〔文献20〕(附表河南省の56-60)は代表例で、すべて長方形単室墓である。構造は直壁の竪穴式の土壌墓で、羨道と甬道はない。玄室の南壁に土製の小龕が一つあり、墓頂は不明であり、そのうちM165、M196、M197の三墓の墓底には二階台（土棺台）が造られていた。

(2) 二期：北齊時期（568年-576年）

二期に3基あり(附表河南省の61-63)、すべて方凸形単室墓である。構造はすべて斜めになった羨道を持つ横穴式の墳墓で、玄室は方凸形単室墓であり、墓頂は穹窿頂であり、玄室には盛んに煉瓦で棺床を築いている。3基のうち2基は壁画墓である。

安陽北齊驃騎大將軍範粹墓（575年）〔文献21〕(附表河南省の62)は直方凸形単室で斜めに下がる羨道を持った横穴式の土洞墓である。斜めになった羨道は長さ11.4m・深さ5mで、玄室は方形・直壁・穹窿頂である。四壁に壁画が描かれていたが、壊れていてその内容はわからない。玄室に煉瓦で棺床を築いている。北齊文宣帝高洋妃顔氏墓〔文献22〕(附表河南省の63)の構造も殆ど同じである。

河南省を総括すると、荊州（南陽）地区では、曹魏の晩期（3世紀50年代）から西晋（265年-317年）・東晋（317年-420年）を経て、南朝の蕭梁末（557年）に至るまで多室・双室墓が主であり、甬道に石で封門を築き、玄室は直壁で、画像石か画像磚による装飾墓である。これらの特徴は、後漢以来の墓制を継承している。ただし、画像石墓は形だけで、墓の画像石は後漢の画像石を再利用して築いたものである。それは荊州（南陽）地区では、本当の意味での画像石墓ではなく、伝統的な画像石の形だけそのまま残ったことである。

司州（洛陽及びその周辺）地区では、一期（247年-317年）において多室墓と双室墓が多く、斜めに下がる羨道を有する磚室墓が主であり、甬道に石で封門を築いている。玄室は直壁が主であり、墓頂は平頂・弧頂・穹窿頂などさまざまであり、それは後漢の伝統葬制の残影である。一期から約170年の空白の後の二期（488年-524年）において急速にすべて単室墓になってきた。

土洞墓が増え、半分近くになってきた。甬道に石で封門を築くことは、北魏宣武帝元恪景陵の外にはない。玄室の弧壁は半数近くになり、墓頂の穹窿頂が主になってきた。三期（526年－6世紀80年代）において土洞墓は磚室墓より多く、特に羨道に“天井”を築く新たな埋葬構造が誕生した。これは中国古代葬制の変革である。また壁画墓の出現は、壁画墓が再び盛んになったことを示す。

相州（安陽）地区では、一期（十六国早期）において鮮卑族の葬制が未だ行われているが、200年以上に及ぶ遺跡の空白のあと二期（北齊時期）に入ると中原の葬制に同化されていく。

（二）河北省

河北省を定州・冀州（景県、石家庄及びその周辺）地区と相州（磁県）地区、瀛州（滄州）地区の三つの地域に区分した。

1. 定州・冀州（景県、石家庄及びその周辺）地区

この地域に7基あり（附表河北省の1－7）、墓の構造の変化によって三期に区分した。

（1）一期：曹魏末から西晋初（3世紀60年－70年代）まで

一期の例は、今のところ井陘磁区曹魏末西晋初墓〔文献23〕（附表河北省の1）のみである。磚築の前室と後室から為り、前室に片耳室が附いた多室墓で、墓壁は直壁であり、後室（玄室）は長方形である。前室は穹窿頂、後室は弧頂である。これは後漢葬制の遺俗である。

羨道と甬道は壊されているので、具体的な長さは不明である。甬道は素面磚で築かれ、拱券弧頂である。封門が2列あり、入り口とその中に煉瓦で封壁を築いている。前室は正方形で、煉瓦で四面壁から墓頂の中心に積み重ねた穹窿頂、後室と前室附きの耳室は磚築の拱券弧頂である。前室の片耳室には煉瓦で祭台が築かれている。

（2）二期：北魏宣武帝の延昌四年（515年）から東魏孝静帝の興和二年（540年）まで

一期から約140年間空白の後の二期に例が4基あり（附表河北省の2－5）、多室・双室・単室墓が共存している。玄室は一期の長方形・直壁・前穹後弧頂から、方形・弧壁・穹窿頂になってきていて、葬制の変化が見られる。

景県東魏冀州刺史高雅夫婦子孫墓（537年）〔文献24〕（附表河北省の4）は単室の非対称な位置に2つの耳室が附いた多室墓であり、石家庄東魏司空李希宗夫婦墓（540年）〔文献25〕（附表河北省の5）は2つの凸形室が甬道で縦に繋がった双室墓であり、河間北魏博陵太守邢偉墓（515年）〔文献26〕（附表河北省の2）は方凸形の単室墓である。玄室はすべて方形・弧壁・穹窿頂である。羨道は景県高雅夫婦子孫墓が15mある。李希宗夫婦墓はすべて素面磚で築かれ、羨道が11.7m・甬道が1.9mある。甬道は拱券弧頂で封門が2列あり、入り口とその中に磚封壁を築いていて、前・後室とも弧方形・外凸弧壁・穹窿頂である。

(3) 三期：東魏孝静帝の武定五年（547年）から北齊の滅亡（577年）まで

三期に2基あり（附表河北省の6-7）、三期において玄室は二期に引き続き方形・弧壁・穹窿であるが、玄室に壁画が描かれている墓が出現し、葬制はさらに変化した。特に平山北齊祠部尚書崔昂墓（566年）〔文献27〕（附表河北省の7）の円凸形の単室墓は顕著である。

景県東魏雍州刺史高長命墓（547年）〔文献24〕（附表河北省の6）は2つの凸形室が甬道で縦に連なる双室墓であり、前・後室とも弧方形・外凸弧壁である。玄室の壁画はほとんどが壊されていて、墓門の壁画しか残っていない。門額の壁画には兜を被って鎧を着、手には武器を持つ武人が描かれており、券門の上に火と「人体獣頭鳥爪」の怪獣が描かれていた。崔昂墓には、玄室に人と鳥獣の壁画が描かれていた。

また、崔昂墓は磚築で、斜めになった羨道の長さは10m、甬道には石門が1ヶ所だけ築かれていた。玄室は円形であり、直径10m・高さ8mで、穹窿頂、玄室に磚で棺床が築かれていた。玄室が円凸形の単室で、甬道に1ヶ所だけ石門を築いた墓は、山東臨淄（清河）の崔氏の特徴的な墓である。崔昂は崔氏一族の成員であるが、死後は祖墓を帰葬することができなかつたため、異郷にも崔氏の円凸形単室墓を築いたのであった。このことは、生前に「聚族而居」し、死後に「聚族而葬」するという後漢以来の伝統的な意識形態が、山東の封建豪族において埋葬制度として具体化したものであった。

2. 相州（磁県）地区

東魏から北齊に至る時期（547年-576年）、この地域には8基の墳墓が認められる（附表河北省の8-15）。壁画墓が7基あり、それはこの地域の著しい特徴である。類型はほぼ弧方凸形単室墓である。構造は斜めの羨道を持った横穴式の磚室墓である。斜めに伸びる羨道は長く、10m以下のものは無い。最長は50mである。甬道も長くなってきた。2m以上が7基あり、最長は6.7mである。甬道に2列以上の厚い封墓施設、石門を築くのが盛んである。玄室はほぼ方形・外凸弧壁・穹窿頂で、玄室に棺床を築くことが盛んに行われた。

装飾墓の壁画墓は盛んに行われている。東魏から北齊にわたって続いた。壁画は羨道・甬道の両側の壁面と玄室の四壁に配置されている。磁県東魏茹茹公主墓（550年）〔文献28〕（附表河北省の9）は弧方凸形の単室墓で、土築の羨道が斜めに伸びている。磚築の甬道には1列の磚封壁・2列の3重磚封壁・1ヶ所の石門という4つの封墓施設がある。玄室は方形・外凸弧壁・穹窿頂で、玄室に磚で棺床を築いている。羨道・甬道の両壁と玄室の四壁に壁画が描かれている。羨道の東壁に青龍と14人の儀仗行列があり、その間隙を蓮華・忍冬の花草紋様、鎮墓威神、方相氏、羽人、朱雀などで飾ってある。また、西壁には東壁と対称的に白虎と14人から成る儀仗行列が見られる。甬道両側に侍衛があり、玄室の北側に玄武・侍者・墓主の茹茹公主あり、西壁に白虎・侍女あり、東壁に男侍がある。磁県北齊文宣帝高洋陵（559年）〔文献29〕（附表河北省の

11) は弧方凸形単室墓であり、羨道は斜坡土築で、磚築の甬道に4列磚封壁と1ヶ所石門の5つ封墓施設である。玄室は方形・外凸弧壁・穹窿頂で、玄室に石棺床を築く。羨道壁画はよく保存されていて、羨道の東壁に青龍・朱雀の神獣と53人から成る儀仗行列が描かれ、流雲、蓮華、忍冬などで紋様を施し、羨道の西壁に白虎・儀仗行列・流雲・蓮華・忍冬などの紋様を装飾してある。甬道と玄室の壁画はかなり壊れているが、甬道の門壁には羽根を拵げている朱雀あり、玄室の天頂に天象図が描かれている。磁県北齊驃騎大將軍開國侯堯峻墓(567年)〔文献30〕(附表河北省の13)は甬道の門壁と両壁に朱雀・蓮華・羽人などを施している。また磁県講武城北齊司馬氏比丘尼垣墓(562年)〔文献31〕(附表河北省の12)、磁県講武城北齊墓M56〔文献31〕(附表河北省の15)にも玄室に壁画が描かれているが、内容は詳細不明である。

3. 瀛州(滄州)地区

この地域に5基あるが(附表河北省の16-20)、北魏から北齊にかけてすべて一様の構造である。即ち、弧方凸形単室墓で、素面磚の斜坡羨道横穴磚室墓であり、甬道には石門がなく、煉瓦で封門してある。玄室は方形・外凸弧壁で、墓頂はすべて不明。

河北省を総括すると、定州・冀州(景県、石家庄及びその周辺)地区では、後漢葬制の遺俗とみられる。曹魏末西晋初(3世紀60年-70年代)の一例があるだけで、他の事例はすべて6世紀以降の墳墓である。即ち、二期に設定した北魏延昌四年(515年)一東魏興和二年(540年)においては多室・双室・単室墓が共存しており、玄室は方形・孤壁で、墓頂は穹窿頂になってきて、葬制に変化が見られる。三期の東魏武定五年(547年)一北齊滅亡(577年)において葬制はさらに変化し、玄室は方形・孤壁・穹窿頂を継承しつつ、玄室に壁画が描かれている墓が出現した。

相州(磁県)では、東魏(547年)から、北齊(576年)に至って、装飾墓の壁画墓は盛んに行われ、羨道と甬道の両側と玄室の四壁に配置されている。墳墓類型はほぼ弧方凸形単室墓で、構造は斜坡羨道横穴式の磚室墓である。甬道に2列以上の厚い封墓施設、石門を築く。玄室はほぼ方形・外凸弧壁・穹窿頂で、玄室内に棺床を築く。

瀛州(滄州)では、北魏から北齊にかけてすべて弧方凸形単室墓であり、甬道には石門がなく、煉瓦で封門してある。玄室は方形・外凸弧壁である。この地域を隣接の定州・冀州・相州と比較すると、磚室の素面磚が特徴的である。

(三) 幽州(北京)地区

この地域に8基あり、築造時期及び墳墓の類型と構造によって二期に区分した。

一期：西晋(265年-317年)

二期：北齊(550年-577年)

(1) 一期：西晋（265年－317年）

一期に7基あり（附表北京市の1－7）、類型とには多室・双室・単室のすべてがあるが、最大の特徴は7基中の6基に共通する長方刀形の玄室である。北京大営村で発掘された西晋墓4基のうちM4〔文献34〕（附表北京市の1）は長方刀形双室附方耳室であり、M3〔文献34〕（附表北京市の2）は長方刀形三室縦列であり、M2〔文献34〕（附表北京市の3）は長方刀形双室縦列であり、M7〔文献34〕（附表北京市の4）、M2〔文献35〕（附表北京市の5）及び北京西郊西晋墓M1〔文献35〕（附表北京市の6）などは長方刀形単室墓である。

羨道は土築で、甬道の入り口に磚封壁があり、甬道に石門がない。多室と双室の前・後室、単室墓の玄室は長方刀形・直壁で、繩文磚で築き、北京西郊西晋墓M1、M2の墓頂は弧頂であり、北京大営村西晋墓M4、M3、M2、M7は穹窿頂である。このような直壁長方刀形磚室墓是北京地域の顕著な特徴である。

(2) 二期：北齐（550年－577年）

二期には一例しかないが、墓の類型は弧方凸形単室墓で一期とは異なっており、この点で変化とみなしてよいかもしれない。玄室は長方刀形と長方形から、弧方形になってきた。その例は北京王府倉北齐墓〔文献36〕（附表北京市の8）であり、斜坡羨道横穴磚室墓である。羨道は未掘で、甬道は0.6m、繩文磚築・拱券弧頂である。玄室は繩文磚築の方形・弧壁・穹窿頂で、墓門は煉瓦で積み重ねている。

(四) 山東省

この地域に20基あり、築造の時期並びに墳墓の類型と構造の変化によって二つの地域及び二期に区分した。

1. 徐州（嘉祥、臨沂、諸城、蒼山、滕州）地区

この地域で曹魏末－西晋（3世紀60年代－317年）期に墓は多室、双室、単室墓すべての類型がある（附表山東省の1－6）。すべて画像（紋様）磚室墓と画像石室墓の裝飾墓である。

画像（紋様）磚室墓の例が3基あるが、諸城西晋早期墓M1〔文献37〕（附表山東省の3）、諸城西晋早期墓M2（285年）〔文献37〕（附表山東省の4）の羨道は土築で、甬道の入り口に磚封壁があるが、石門はない。甬道と墓室はすべて繩文、長方形、三角形、台形、米形などの幾何図紋様や菱形、乳釘、卷雲などの画像（紋様）磚で築き、前、後室は方形で、穹窿頂である。臨沂金雀山魏晋張氏画像磚墓〔文献38〕（附表山東省の2）は羨道がなく、甬道の入り口に磚封壁があるが、石門はない。玄室は朱雀と玄武の仙禽神獸、人、蓮華、五銖錢、漢字の「張」と「弓」などの画像（紋様）磚で築き、画像（紋様）磚はすべてモールドイングであり、玄室は長方形で、拱券弧頂である。

画像石室墓の例も3基あり、嘉祥紙坊鎮画像石墓（曹魏末西晋初）〔文献39〕（附表山東省の1）は漢代の祠堂の画像石を取って墓を造っていたものであり、蒼山画像石墓（西晋）〔文献40〕（附表山東省の5）は西晋の人が後漢の画像石墓を利用した上で、自分の墓を造ったのである。滕州西晋元康九年石室墓（299年）〔文献41〕（附表山東省の6）だけは西晋の当時に築いた墓であるが、山東における西晋の画像石墓の様相を反映している。滕州西晋元康九年石室墓（299年）は竪穴土壙石室墓で羨道と甬道は無いが、前室・後室は「壘梁式」の穹窿頂で、双耳室は平頂である。画像石の配置は前室の南壁と天頂と墓壁の横額に嵌め込み、内容は金鳥、青龍、白虎、朱雀、魚の仙禽神獸、九頭人面獸、有翼の仙人である。彫刻技法は浮面浅浮彫である。

2. 青州（臨淄、寿光）・齊州（済南）地区

石室単室墓はこの地域で北魏孝文帝拓跋宏の太和17年（493年）—北朝（6世紀70年代）期の最大特徴であるが、特に臨淄の崔氏一族の円凸形石室単室墓が目立っている。装飾墓は画像石墓と壁画墓が並存する

崔氏一族墓〔文献42〕、〔文献43〕（附表山東省の7—16）の類型と構造はほぼ同じである。斜坡羨道があるが、発掘されていない。不明である。ある墓は甬道が短く、外凸石門の形になって、すべての墓に石門を築き、石門の扉がないものは碎石で密封している。玄室は円形、壁は石材で「人」字の形のように積み重ね、穹窿頂で、棺床を築くのは続いている。

羨道については、済南東八里窪北齊石室壁画墓〔文献44〕（附表山東省の18）は斜坡土築であり、済南北齊祝阿県令道貴石室壁画墓（571年）〔文献45〕（附表山東省の19）は斜坡石築である。道貴石室壁画墓の甬道には石門が1ヶ所ある。玄室は、寿光北魏鎮東將軍賈思伯磚室壁画墓（525年）〔文献46〕（附表山東省の17）、済南東八里窪北齊石室壁画墓、道貴石室壁画墓などは方形で、淄博和庄北齊石室墓〔文献47〕（附表山東省の20）は長方形である。墓壁は弧壁墓が2基あり、直壁墓が1基ある。道貴石室壁画墓と淄博和庄北齊石室墓の石室は石材で積み重ねておるが、済南東八里窪北齊石室墓の石室の特徴は自然石を積み重ねていた。

装飾墓（画像石墓と壁画墓）が5基ある。画像石墓が1基あり、臨淄北齊崔德石室墓（565年）〔文献42〕（附表山東省の11）である。画像石は墓門の門扉に配置され、内容は蓮華、忍冬文、菱形図で、彫刻技術は浮彫である。壁画墓が4基あるが、寿光北魏賈思伯墓は山東で最早の壁画墓である。残念ながら壁画はほとんど剥落していて、その内容もわかっていない。済南東八里窪石室墓は玄室の東・西・北の三つの壁（墓門以外の壁）と天頂に壁画が描かれている。北壁の壁画はよく保存されていて、画面は「屏風式」で、その内容は「褰衣博帯」装の侍女、侍童と主人の樹下飲酒図である。済南北齊道貴石室壁画墓（571年）は甬道門壁に白虎を施し、玄室の天頂に天象図あり、四壁に「屏風式」の胡装の墓主侍衛、車馬人物、儀仗行列が描かれている。

(五) 山西省

山西には18基の墳墓があり、築造時期及び墳墓の類型により三つの地域に区分した。

1. 北魏の都の平城（大同）地区

この地域に北魏墓が11基あり（附表山西省の1-11）、単室墓が主であり、8基ある。長方形竪穴単室墓、長方凸形単室墓、方凸形単室墓である。土洞墓と磚室墓の両方が併存している。磚室墓は縄文磚で築き、墓壁は直壁と弧壁の両方があり、墓頂は弧頂と穹窿頂である。長斜坡羨道も続いている。玄室に棺床を築くことが山西にも定着しつつあって、3基ある。

大同南郊北魏墓M112〔文献48〕（附表山西省の4）は直方凸形単室で、斜坡羨道土洞墓である。直壁で、墓頂は不明、玄室に石棺床を築く。大同南郊北魏墓M109〔文献48〕（附表山西省の3）は長方凸形単室で、斜坡羨道横穴土洞墓である。羨道は土築、磚封門があり、甬道がない。玄室は長方形で、直壁の両壁に小龕があり、墓底は平坦で、墓頂は弧頂である。大同北魏洛州刺史封和突將軍墓(501年)〔文献49〕（附表山西省の10）と大同北魏三州刺史元淑將軍墓(508年)〔文献50〕（附表山西省の11）は弧方凸形単室で、斜坡羨道横穴磚室墓である。羨道は土築の斜坡である。甬道は磚築、拱券弧頂である。封和突墓の甬道には封門壁が2列あり、元淑墓は羨道の長さは22.8mであり、甬道に磚築の1重、5重、2重、3重の磚壁の封門施設が4列ある。玄室は方形、弧壁、穹窿頂であり、玄室に磚棺床を築く。

この地域における特に高い身分の墓は北魏瑯琊王司馬金龍墓（484年）〔文献51〕（附表山西省の7）、北魏馮太后永固陵（490年）〔文献52〕（附表山西省の8）、北魏孝文帝万年堂（490年）〔文献52〕（附表山西省の9）である。司馬金龍墓は前後室、前室附片耳の多室の横穴磚室墓であり、斜坡羨道は長く（28.1m）、墓門は磚封壁で封じた。玄室は方形・弧壁・穹窿頂で、山西において最初の棺床を築く墓である。馮太后永固陵は甬道をもつ方凸形双室縦列の双室墓であり、斜坡羨道は長く（26m）、甬道に6列の磚封壁と2ヶ所石封門など8つの封墓施設があり、玄室は方形・弧壁、墓頂は前室弧頂で、後室穹窿頂である。

2. 并州（太原、寿陽、忻県）地区

この地域に5基あり（附表山西省の12-16）、築造時期と墳墓の類型により二期に区分する。

(1) 一期：北魏（386年-534年）

現在この時期例は太原北魏青州刺史辛祥墓（520年）〔文献53〕（附表山西省の12）である。直方凸形単室墓で、構造は竪井式羨道の横穴土洞墓であり、玄室は方形・直壁・穹窿頂である。

(2) 二期：北齊（550年-577年）

この時期の例が4基あり（附表山西省の13-16）、類型は弧方凸形単室墓であるが、新たに出現した壁画墓と壁画・天井墓はその特徴である。

構造は斜坡羨道横穴磚室墓であり、長い斜坡羨道はすべて10m以上で、最長は21.3mである。甬道に厚い2列の厚い磚封壁と石封門を築くことは続いて流行している。玄室は方形・弧壁・穹窿頂で、玄室に磚棺床を築く。

寿陽北齊順陽王庫狄廻洛墓（562年）〔文献54〕（附表山西省の13）は弧方凸形単室で、斜坡羨道横穴磚室墓である。羨道は土築、長さ12.5mである。甬道の入り口に石門が1ヶ所あり、甬道は長さ3.1mで、磚築、拱券弧頂である。玄室は方形・弧壁・穹窿頂である。太原北齊東安王婁叡墓（570年）〔文献55〕（附表山西省の15）は弧方凸形単室で、斜坡羨道横穴磚室墓である。羨道は土築、長さ21.3mである。甬道は長さ8.3mで、磚築、拱券弧頂であり、甬道に天井を1つ築き、天井の墓室側に封壁が1列あり、墓室の入り口に封壁が1列あり、両封壁の真中に石門が1ヶ所ある。玄室は方形・弧壁・穹窿頂である。

山西に最初の壁画墓は庫狄廻洛墓（562年）である。壁画は甬道両壁と天頂、玄室の四壁に配置し、胡服芸人・青龍・白虎・朱雀・祥雲忍冬が描かれている。

婁叡墓（570年）は羨道の両壁と甬道の天井、玄室に壁画を施している。内容は車馬出行・門吏儀仗・歌舞伎楽などの墓主の生前生活と青龍、白虎の祥瑞神獣と雷公の天象の死後天国である。太原南郊北齊壁画墓〔文献56〕（附表山西省の16）は玄室四壁に上・中・下を3段に配置したが、上層は星辰天象図で、中層は乗龍騎虎の神仙・羽人で、下層は墓主夫人・門吏侍者・車馬出行図である。

3. 司州（運城、曲沃）地区

この地域に2基あり、築造時期により二つの時期に区分した。

(1) 一期：西晋

この期は山西運城十里鋪西晋墓〔文献57〕（附表山西省の17）の一例のみである。類型は多室墓で、前・中・後3室と後室に附属した片耳室から為る。構造は斜めに下がる羨道を有する横穴式の磚室墓であり、傾斜のついた羨道は発掘されていないが、甬道の入り口に磚で出来た封門がある。1.2mの甬道には磚の封壁があり、甬道は素面磚の拱券弧頂で、前・中・後・耳室はすべて直壁であり、玄室は長方形で、素面磚の穹窿頂であり、棺床と祭台は築かれていない。

(2) 二期：北魏孝文帝拓跋宏の太和23年（499年）

この期は曲沃県秦村北魏李詵墓（499年）〔文献58〕（附表山西省の18）一例のみである。類型は単室が2つの耳室を対称的な配置に持つ多室墓である。また、斜めに下がる羨道に“天井”を有する横穴式の磚室墓でもある。斜めの羨道は長く、傾斜が53度、長さは14.5mあり、“天井”を一つ築く。南北朝時代の墳墓で天井を有する最早の事例である。玄室は方形・弧壁・紋様磚の穹窿頂であり、磚で棺床を築く。

三、時期の変遷と地域間の相違

ここまで華北（河南、河北、北京、山東、山西）の墳墓を整理・分類した上で、その地域の墓室構造の変化を基に時期を区分した。その結果、それぞれの地区において時代によって墳墓はどのように変わっていたかの脈絡、つまり暦年の経過と共に変遷してゆく状況がかなり明確になった。また、地域に固有な特性が存在する事実も明らかになった。各省の特徴としていくつか指摘することができる。

1. 時期の変遷

魏晋南北朝時期における華北の墳墓について、その類型と構造は地区と時期によって相違と変遷が見られる。

(1) 墳墓類型

多室・双室・単室の三種類の墓が共存している状況から、単室墓に収斂していく傾向が見られる。

河南地区では、曹魏晩期—西晋時期に多室墓と双室墓は大きな割合を占めているが、北魏の太和十二年（488年）孝文帝による洛陽遷都以前のある時期以降、多室・双室・単室の多様な類型から、急に全て単室墓になってきた。

河北の定州・冀州（景県・石家庄及びその周辺）地区では、540年代まで多室・双室・単室墓が併存したといえる。

北京（幽州）では、西晋時期には玄室が長方刀形の多室・双室・単室墓が併存しているが、西晋晩期（307年）になると長方凸形単室墓になって、北齐時期には弧方凸形単室墓になってゆく。

山東では曹魏末西晋初（3世紀60年代—317年）の徐州（嘉祥、臨沂、諸城、蒼山、滕州）地区には多室・双室・単室墓すべての種類の墓がある。画像（紋様）磚室墓と画像石室墓が主である。北魏孝文帝の太和17年（493年）以降北朝末（577年）まですべて石室単室墓となり、これは青州（臨淄、寿光）・齐州（済南）地区の最大特徴であるが、装飾墓としては画像石墓と壁画墓が並存している。

山西では魏都の平城（大同）、并州（太原、寿陽、忻県）地区においては北魏初から北齐までほとんどが単室墓であるが、例外もあり、それは最高身分の司馬金龍の多室墓と北魏馮太后永固陵・北魏孝文帝万年堂の双室墓である。司州（運城、曲沃）地区は西晋に一例多室墓があり、北魏太和23年（499年）の李詵墓も多室墓であるが、用例が少ないため参考に留める。

(2) 墳墓構造

以上の整理をふまえて墳墓構造を概観すると、注目すべきいくつかの変化を指摘することができる。まず、魏晋南北朝期に槨墓は消え、すべて室墓になったが、それらはほぼ横穴室墓である。また、斜坡羨道横穴磚室墓が主である状況から、斜坡羨道横穴磚室墓と斜坡羨道土洞墓の両者並

存へ移行している。ただし、河南の南陽地区にある斜坡羨道横穴磚石墓と山東地区の斜坡羨道横穴石室墓との違いに見られるような地域的特性もある。墓壁は直壁から、直壁と弧壁の両者並存状況を経て、弧壁が主であることに変化した。さらに、墓頂は平頂、弧（アーチ）頂、穹窿頂という多様なあり方から、純粋な穹窿頂に変遷した。玄室には棺床を築くことが普及する。装飾墓は画像石墓、画像（紋様）磚墓から壁画墓へと展開する。

また、長斜坡羨道天井横穴土洞墓の斜坡羨道に天井を築くことは、中国古代理葬制度において画期的な変化である。伝統的な墓とは異なる新たなスタイルの誕生は、当時の社会情勢がある種の変化をしたことを窺わせる。この墓制は後世の隋、唐時代に継承され、盛んに行われていく。

以上の概観を地域別にみていくと、以下のようになる。

河南の司州（洛陽及び周辺）の中原地区では、一期の曹魏正始八年（247年）から西晋滅亡（317年）までに斜坡羨道磚室墓が主であり、甬道に石封門を築く。玄室は直壁が主で、墓頂は平頂、弧頂、穹窿頂などさまざまであり、それは後漢の伝統葬制の残影である。二期の北魏太和十二年（488年）から北魏正光五年（524年）までにおいては土洞墓が増えて、半分近くになってきた。甬道に石封門を築くことは、北魏宣武帝元恪景陵（515年）の例だけであり、玄室の弧壁は半数近くになり、墓頂穹窿頂が主になってきた。三期の北魏孝昌二年（526年）から北朝晩期（6世紀80年代）までの間、土洞墓は磚室墓より多く、特に羨道に天井を築く新たな埋葬制度が誕生した。また壁画墓の出現は、壁画墓が再び盛んになったことを示す。

河南の相州（安陽）では、一期（十六国早期）において鮮卑族の直壁竪穴土壙墓の葬制は堅持されているが、200年の空白期の後、二期（北齊）に入ると中原の葬制に同化されて斜坡羨道横穴墓となり、玄室の墓壁は直壁と弧壁の両者が並存し、墓頂は穹窿頂、玄室には磚棺床を築き、壁画も描かれている。

河北の定州・冀州（景県・石家庄及びその周辺）では、一期の曹魏末西晋初において後漢葬制の遺俗である長方形玄室の直壁多室墓が一例あるが、250年の空白期の後、二期の北魏延昌四年（515年）から東魏興和二年（540年）の間、玄室は方形・弧壁、墓頂は穹窿頂となるという葬制の変化が見られる。三期の東魏の武定五年（547年）から北齊滅亡（577年）の間、玄室は方形・弧壁・穹窿頂を踏まえた上で、玄室に壁画が描かれている墓が出現し、葬制はさらに変化した。

河北の相州（磁県）では、東魏末（547年）から北齊（576年）に至って、装飾墓の壁画墓が盛んに行われ、羨道と甬道の両側と玄室の四壁に配置されている。墳墓類型はほぼ弧方凸形単室墓である。構造は斜坡羨道横穴式の磚室墓である。甬道に2列以上の厚い封墓施設、石門が築かれている。玄室はほぼ方形・外凸弧壁・穹窿頂で、玄室には棺床が築かれている。

河北の瀛州（滄州）では、北魏から北齊にかけてすべて弧方凸形単室墓であり、甬道には石門が無く、煉瓦で封門してある。玄室は方形・外凸弧壁である。

北京（幽州）では、西晋晩期に長方刀形の玄室直壁墓から、長方の玄室弧壁墓に変化し、約

250年の空白の後、北齊には方形の玄室弧壁墓になった。

山東の徐州（嘉祥、臨沂、諸城、蒼山、滕州）では、曹魏末西晋初の画像石室墓と画像（紋様）磚室墓が主である。画像石室墓3基のうち、2基は西晋の人が後漢の画像石墓を利用した上で、自分の墓を造ったものである。滕州西晋元康九年石室墓（299年）は西晋時に新しく築いた墓であるが、山東地方の画像石墓の様相を反映している。その墓は竪穴土壙式の石室墓であり、羨道と甬道は無いが、前室と後室は「疊梁式」の穹窿頂で、双耳室は平頂である。

山東の青州（臨淄）では、北魏の太和17年（493年）から北朝末まで清河崔氏一族の墓10例を数えるが、石室単室墓が最大の特徴である。すべての墓に石門を築き、石門の扉がないものは碎石で密封している。玄室は円形、壁は石材で「人」字の形のように積み重ね、穹窿頂で、石で築かれた棺床を設けるといった構成は変わらず続いている。

山東の青州・齊州地区では、そのほか崔氏一族以外の墳墓で525年以降のものが4基ある。石室墓が多い点では崔氏一族墓と共通するが、崔氏墓が円凸形単室墓であるのに対し、孤方・直方・長方の並存する凸形単室墓である点で異なっている。

山西の魏都平城（大同）では、この地域に曹魏末西晋初の墓は未だ発見されていないが、北魏墓が11基あり（附表山西省の1-11）、皇帝や太皇太后などの最高身分にかかわる3基（附表山西省の7-9）を除けば、他の8基はすべて単室墓である。被葬者の判明していない墳墓の大半は直壁の土洞墓であるが、高い身分の被葬者は孤壁の磚室墓である。また、身分的な相違とかかわりなく斜めに下がる長い羨道も引き続き造られ、玄室に棺床を築いたものが3基ある。

山西の并州（太原、寿陽、忻県）では、曹魏末西晋初の墓はまだ発見されていないが、北魏墓が1基あり、北齊墓が4基ある。北魏墓は竪穴系横口式の土洞墓であり、玄室は方形・直壁・穹窿頂である。北齊に壁画墓と壁画・天井墓が新たに出現したが、北齊の高官婁叡墓（570年）の甬道には方形の“天井”が築かれ、羨道の両壁と甬道の天頂や玄室の四壁に壁画を施している。またこの地域では甬道に厚い2列の厚い磚封壁と石封門を築くことが続いて流行している。玄室は主として方形・弧壁・穹窿頂であり、磚で棺床を築いている。

山西の司州（运城、曲沃）に2基があるが、事例が少ないためこの地域の特徴を抽出することは保留しておく。ただし、曲沃県秦村北魏李詵墓（499年）は斜めに下がった羨道に“天井”のある横穴式の磚室墓であり、傾斜のある羨道に“天井”を一つ築く。華北における天井築造例として現在のところ初出であり、“天井”の発生を探る上で極めて貴重な墳墓であるが、発掘報告が1959年と古くその詳細を明らかにすることは難しい。

装飾墓についていえば、画像石墓・画像（紋様）磚墓から壁画墓へと展開する。

河南の荊州（南陽）では、曹魏両晋南朝の墳墓はすべて画像石墓である。長方形の石室が縦に2つ繋がっている。甬道にはすべて石門があり、玄室はすべて直壁で、墓頂が石材の平頂、煉瓦

の弧頂と穹窿頂がある。ただし、画像石墓は形だけで、画像石は後漢の画像石を再利用して築いたものであるため、本当の意味での画像石墓ではないが、墳墓造営者に画像の必要性が認識されたということは指摘できる。

山東徐州（嘉祥、臨沂、諸城、蒼山、滕州）では、曹魏末から西晋初においては画像石室墓と画像（紋様）磚室墓が主である。画像石室墓3基のうち2基は西晋の人が後漢の画像石墓を利用して自分の墓を造っている。滕州西晋元康九年石室墓（299年）だけは西晋当時に築いた墓で、山東における西晋画像石墓の様相を反映している。画像石の配置は前室の南壁・天頂・墓壁の横額に嵌め込み、内容は金鳥・青龍・白虎・朱雀、魚の仙禽・神獸、「九頭人面獸」、羽人の仙人である。彫刻技法は浮面浅浮彫である。画像（紋様）磚室墓が3基あり、甬道の入り口に磚の封壁があるが、石門はない。幾何図紋様、朱雀・玄武の仙禽・神獸、人、蓮華、五銖錢、漢字の「張」と「弓」などの画像（紋様）磚で築き、画像（紋様）磚はすべてモールドディングである。

山東の青州（臨淄、寿光）・齊州（済南）地区では、装飾墓は画像石墓と壁画墓が並存する。画像石墓は1基あり、崔徳石室墓（565年）がそれである。画像石の配置は墓門の門扉にあり、内容は蓮華・忍冬文・菱形図であり、彫刻技術は浮彫である。4基ある壁画墓のうち、山東で最も早い時期の賈思伯墓は、玄室の東・西・北の三つの壁（墓門以外の壁）と天頂に壁画が描かれている。画面は「屏風式」の形で、その内容は「褒衣博帶」装の侍女、侍童と主人の樹下飲酒図であり、白虎を施し、玄室の天頂に天象図があつて、胡装の墓主侍衛・車馬人物・儀仗行列が描かれている。

河北の相州（磁県）では、装飾墓の壁画墓は東魏から北齊にわたって盛んに行われている。壁画は羨道・甬道それぞれの両側と玄室の四壁に配置されている。磁県東魏茹茹公主墓（550年）は羨道と甬道の両壁、玄室の四壁に壁画が描かれているが、羨道の東壁に青龍と14人の儀仗行列、その間に蓮華・忍冬の花草紋様、鎮墓威神、方相氏、羽人、朱雀などが飾つてあり、西壁には対称の白虎と14人から成る儀仗行列が見られる。甬道の両側には侍衛があり、玄室の北側に玄武・侍者・墓主の茹茹公主があり、西壁に白虎・侍女があり、東壁には男侍がある。北齊文宣帝高洋陵（559年）の羨道の壁画はよく保存されていて、羨道の東壁に青龍・朱雀の神獸と53人から成る儀仗行列が描かれ、流雲・蓮華・忍冬などで紋様を施し、羨道の西壁に白虎・儀仗行列・流雲・蓮華・忍冬などの紋様を装飾した。甬道と玄室の壁画はほとんど壊れているが、甬道の門壁に羽根を広げている朱雀があり、玄室の天頂には天象図が描かれている。北齊司馬氏比丘尼垣墓（562年）、磁県講武城北齊墓M56は玄室に壁画が描かれているが、内容は不明である。堯峻墓（567年）は甬道の門壁と両壁に朱雀・蓮華・羽人などを施してある。

山西の并州（太原、寿陽、祈県）では、北齊に壁画墓及び、甬道に方形の“天井”が築かれる壁画・天井墓が新たに出現した。羨道の両壁と甬道の天井・天頂や玄室の四壁に壁画を施している。その内容は胡服芸人、青龍、白虎、朱雀、祥雲忍冬、星辰天象図、乗龍騎虎の神仙、羽人、

墓主夫人、門吏侍者、車馬出行図、歌舞伎楽などである。

総括すると、装飾墓は曹魏末から西晋初においての画像石室墓、画像（紋様）磚室墓から、北魏と北斉の壁画へ変化し、分布地域は河南南陽と山東地区のみから、河南、河北、山東、山西などすべての華北地区へ広がっている。配置は墓の門楣、門枳、立ち柱、天井、玄室の底、壁、天頂に嵌め込み、墓室の羨道と甬道の両壁、玄室の四壁に壁面いっぱい描かれるように変化した。内容は「伏羲」、「女媧」、「西王母」、「九頭人面獸」などの歴史伝説の神仙、「泗水起鼎」の神話故事、「周公輔成王」、「孔子見老子」の古代聖賢図等々は北魏時期になくなったが、そのかわりに星辰、雷公の天象図が出現し、装飾紋様は卷雲、菱形文、水波文、斜線文などの簡素紋様から、流雲、蓮華、忍冬、花草などの豪華紋様へ変遷した。

2. 地域間の相違

(1) 装飾墓：曹魏末—西晋の時期に画像石墓が盛んに造られるのは、河南南陽地区（荊州）と山東のみである。また、画像（紋様）磚墓は山東にしかない。

河南南陽地区（荊州）にある10基の墓はすべて画像石墓であるが、山東の徐州（嘉祥、臨沂、諸城、蒼山、滕州）地区では6基のうち3基が画像石墓である。ただし、この3基のうち2基は後漢の墳墓の画像石を再利用したものであることに留意せねばならない。残り3基は画像（紋様）磚室墓である。

(2) 直壁墓：河南の各地においても直壁墓は曹魏晩期（3世紀50年代）から北朝晩期（6世紀80年代）に至って引き続き行われている。

河南南陽（荊州）地区にある10基の曹魏末—西晋の墓はすべて直壁墓であるが、司州（洛陽及びその周辺）地区では、一期の曹魏正始八年（247年）—西晋滅亡（317年）の間に26基のうち23基が直壁墓で、残り3基は弧壁墓である。二期の北魏太和十二年（488年）から北魏正光五年（524年）にかけての7基のうち直壁墓は4基である。三期の北魏孝昌二年（526年）から北朝晩期（6世紀80年代）までの12基のうち5基が直壁墓である。相州（安陽）地区では、一期の十六国早期の鮮卑族墓はすべて直壁墓であるが、二期の北斉期に3基のうち直壁墓は1基で、もう1基は不明である。

(3) 刀形墓：西晋の幽州（北京）地区では多室・双室・単室墓に共通して磚で築かれた長方刀形墓が見られる。これは他処にない特徴である。

北京大営村西晋墓M4は長方刀形の2室に方耳室が附いたものであり、M3は長方刀形の3室が縦に連なったもの、M2は長方刀形の2室が縦に繋がったものであり、M7とM2及び北京西郊西晋墓M1の3つは長方刀形単室墓である。

(4) 石室墓：山東においては、一貫して石室墓が顕著である。

曹魏末西晋初の徐州（嘉祥、臨沂、諸城、蒼山、滕州）から、北齊の青州（臨淄、寿光）、齊州（済南）にかけてはすべて石室墓である。青州（臨淄、寿光）・齊州（済南）の北齊壁画墓も石室壁画墓である。また、臨淄の崔氏一族墓は北齊崔徳画像石墓以外、すべて円凸形単室石室墓である。

3. 文化地域間の波及と受容

墓制の変化は、新たな動向の主導的な役割を果たした地域から、その地域の周辺へと波及して、変化を主導した地域とそれを受容した地域といった差異が見出される。また、先進的な文化が徐々に受け容れられるのが一般的な趨勢と考えられるが、古代社会の変化は必ずしも齊一的なものではなく、特に統治者が伝統文化の代表として、先進的な地域に古い文化を強制するような場合もあるのである。周辺からの影響を受け容れる場合もある。例えば、弧壁単室墓は中心部としての河南より河北・山西・山東など周辺に多く、それは河南に後漢の伝統的な葬制が強固に残存していたためであると考えられる。また、羨道に“天井”を最初に築いた地域は、司州の中心としての洛陽ではなく、司州の曲沃県秦村（山西）北魏李詵墓（499年）であった点は注目に値する。

以上について指摘したが、華北諸省の小地域ごとに築かれた墳墓の変遷を辿ってみると、類型、及び埋葬形態は、古い形と新しい形は一斉に交替するのではなく、古い形が歴史的役割を終わる以前に新しい形が出現し、両者はある期間併存し、競合しながら漸進的に交替する。これは、先進的な人々が変化を求め、保守的な階層が伝統を重んじた結果であるといえる。

ただし、受け入れた新しい要素に自らのものを徐々に加えていき、漸進的に変化を進行する一方で地域性が色濃く反映されていることもうかがえる。たとえば、ある地域の墳墓が他地域においても同様の形成を遂げながら、一部の形については異なった特色を示すということである。

おわりに

墓の構造の変遷は、単なる葬送儀礼のあり方だけを示すものではなく、そこには当時の政治、経済、思想などが強く反映されているのである（黄曉芬 2000）

また、墓の主体として墓室は、人間の死に伴って行われる精神活動に可視的一側面を示している。なぜその時期にその地域で、その形の墓が盛んであったか、なぜその当時にその形の墓に変わったのか、その変化の原因について説明しようとする、新しい文化、思想や民族の移動、社会構造などの大きい変化が引き合いに出されるが、こうした事象と具体的な埋葬行為とは直接結びついているわけではない。埋葬行為を実際に行っているのは、そこに参加している人間の思想意識形態と社会習俗などである（松本直子 2000）。

このような観点に触発されて本稿では魏晋南北朝における華北各省の墳墓の変化について時間上の変化と地域間における差異の具体像を追求してきた。その原因の究明は今後の課題であるが、インドからの仏教の伝来に伴い、新しい思想・文化・意識形態が到来した点や、激しい政権交替・恒常的な民族移動に伴って、騎馬民族などの習俗を取り込んだ点などいくつか想定される。しかし、データの収集分析は華北にとどまっている。次なる目標は同時期の華中（江蘇、安徽、湖北）の墳墓の様相はどのようなものであるか、時代によってどのように変わっていったかであるが、また、地域に特定した形態は、その時期的変遷についてはどうであったのか、これらについての考察は別稿に譲りたい。

注 : 術語のうち、日本語に適切な訳語が見当たらないものについては、中国での用語をそのまま用いた。

注1 : 『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第12号 2001年

引用論著

- 勅使河原彰 「時代区分論」『日本考古学を学ぶ(1)』 有斐閣 1975年
藤本強 「年代決定論」『岩波講座 日本考古学1 研究の方法』 理想社 1985年
斉藤忠 『日本考古学が概論』 吉川弘文館 1982年
近藤義郎 「総論」『岩波講座 日本考古学6 変化と画期』 岩波書店 1986年
山下志保 「漢代画像石墓の構造と変遷」『古文化談叢』第25集 九州古文化研究会 1991年7期
黄晓芬 『中国古代葬制の伝統と変革』 勉誠出版 2000年
松本直子 『認知考古学の理論と実践的研究』 九州大学出版会 2000年

【参考文献】

- (1) 張小舟「北方地区魏晋十六国墓葬的分区和分期」『考古学報』1987年1期
- (2) 葉驍軍『中国墓葬發展史』甘肅文化出版社 1994年
- (3) 劉彦軍「簡論五胡十六国和北朝時期的北方墓葬」『中原文物』1986年3期
- (4) 南陽市博物館「南陽市王庄漢画像石墓」『中原文物』1985年3期
- (5) 河南省文物工作隊「河南南陽東関晋墓」『考古』1963年1期
- (6) 南陽市文物工作隊「南陽市邢營画像石墓發掘報告」『中原文物』1996年1期
- (7) 南陽市文物工作隊「南陽市菜材市場画像石墓發掘簡報」『中原文物』1994年1期
- (8) 南陽市文物工作隊「南陽市第二化工廠21号画像石墓發掘簡報」『中原文物』1993年1期
- (9) 河南省文物工作隊『鄧县彩色画像磚墓』文物出版社 1958年
- (10) 河南省文物工作隊第二隊「洛陽晋墓的發掘」『考古学報』1957年1期
- (11) 中国社会科学院考古所洛陽漢魏城隊「北魏宣武帝景陵發掘報告」『考古』1994年9期
- (12) 中国社会科学院考古所河南二隊「河南偃師縣杏園村的四座北魏墓」『考古』1991年9期
- (13) 洛陽市文物工作隊「洛陽孟津晋墓、北魏墓發掘簡報」『文物』1991年8期
- (14) 黃明蘭「西晋裴祗和北魏元暉兩墓拾零」『文物』1982年1期
- (15) 偃師商城博物館「河南偃師兩座北魏墓發掘簡報」『考古』1993年5期
- (16) 洛陽博物館「洛陽北魏元邵墓」『考古』1973年4期
- (17) 310国道孟津考古隊「洛陽孟津邙山西晋北魏墓發掘報告」『華夏考古』1993年1期
- (18) 洛陽博物館「河南洛陽北魏元父墓調查」『文物』1974年12期
- (19) 洛陽市文物工作隊「洛陽孟津北陳村北魏壁画墓」『文物』1995年8期
- (20) 中国社会科学院考古所安陽隊「安陽孝民屯晋墓發掘報告」『考古』1983年6期
- (21) 河南省博物館「河南安陽北齊範粹墓發掘簡報」『文物』1972年1期
- (22) 安陽県文教局「河南安陽県清理一座北齐墓」『考古』1973年2期
- (23) 程明遠「河北井陘砦区清理一座古墓」『考古』1958年5期
- (24) 河北省文管処「河北景县北魏高氏墓發掘簡報」『文物』1979年3期
- (25) 石家庄文物發掘組「河北贊皇東魏李希宗墓」『考古』1977年6期
- (26) 孟昭林「記後魏邢儂墓出土物及邢儂墓的發現」『考古』1959年4期
- (27) 河北省博物館「河北平山北齐崔昂墓調查報告」『文物』1973年11期
- (28) 磁県文化館「河北磁県東魏茹茹公主墓發掘簡報」『文物』1984年4期
- (29) 中国社会科学院考古所鄴城隊「河北磁県湾漳北朝墓」『考古』1990年7期
- (30) 磁県文化館「河北磁県東陳村北齐堯峻墓」『文物』1984年4期
- (31) 河北省文管会「河北磁県講武城古墓清理簡報」『考古』1959年1期

- (32) 河北省滄州地区文化館「河北省吳橋四座北朝墓葬」『文物』1984年9期
- (33) 王敏之「黃驊縣北齊常文貴墓清理簡報」『文物』1984年9期
- (34) 北京市文物工作隊「北京市順義縣大宮村西晉墓葬發掘簡報」『文物』1983年10期
- (35) 北京市文物工作隊「北京西郊發現兩座西晉墓」『考古』1964年4期
- (36) 馬希桂「北京王府倉北齊墓」『文物』1977年11期
- (37) 諸城縣博物館「山東省諸城縣西晉墓清理簡報」『考古』1985年12期
- (38) 臨沂市博物館「山東臨沂金雀山画像磚墓」『文物』1995年6期
- (39) 嘉祥縣文管所「山東嘉祥紙坊画像石墓」『文物』1986年5期
- (40) 臨沂地区文管會「山東蒼山縣晉墓」『考古』1989年8期
- (41) 滕州市文化局「山東滕州市西晉元康九年墓」『考古』1999年12期
- (42) 山東省文物考古所「臨淄北朝崔氏墓」『考古學報』1984年2期
- (43) 淄博市博物館「臨淄北朝崔氏墓地第二次清理簡報」『考古』1985年3期
- (44) 山東省文物考古所「濟南市東八里窪北朝壁画墓」『文物』1989年4期
- (45) 濟南市博物館「濟南市馬家庄北齊墓」『文物』1985年10期
- (46) 壽光縣博物館「山東壽光北魏賈思伯墓」『文物』1992年8期
- (47) 淄博市博物館「臨博和庄北朝墓葬出土青釉蓮華瓷尊」『文物』1984年12期
- (48) 山西省考古所「大同南郊北魏墓群發掘簡報」『文物』1992年8期
- (49) 馬玉基「大同市小站村花圪塔台北魏墓清理簡報」『文物』1983年8期
- (50) 大同市博物館「大同東郊北魏元淑墓」『文物』1989年8期
- (51) 山西省大同市博物館「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」『文物』1972年3期
- (52) 大同市博物館「大同方山北魏永固陵」『文物』1978年7期
- (53) 代尊德「太原北魏辛祥墓」『考古學集刊』1(1979年)
- (54) 王克林「北齊庫狄迴洛墓」『考古學報』1979年3期
- (55) 山西省考古所「太原市北齊婁叡墓發掘簡報」『文物』1983年10期
- (56) 山西省考古所「太原南郊北齊壁画墓」『文物』1990年12期
- (57) 山西省考古所「山西運城十里鋪磚墓清理簡報」『考古』1989年5期
- (58) 楊富斗「山西曲沃縣秦村發現的北魏墓」『考古』1959年1期

附表

中国魏晉南北朝墳墓

長x単位: m

河南省

番号	墳墓名	所在地	三国	西晉	十六国	東晉	南朝	北朝	埋葬施設形態				墓室施設形態				規模(後室)	葬俗	参考文献	
									形制	種類	裝飾	裝飾	形制	形制	構造	開口				天井
1	南陽樊城西面像石墓M1	南陽	魏(後)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	中原96
2	南陽樊城西面像石墓M2	南陽	魏(後)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	中原96
3	南陽樊城21号画像石墓	南陽	魏(後)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	中原93.1
4	南陽樊城21号画像石墓	南陽	魏(後)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	中原93.1
5	南陽樊城21号画像石墓	南陽	魏(後)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	中原93.1
6	南陽樊城21号画像石墓	南陽	魏(後)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	中原93.1
7	南陽樊城21号画像石墓	南陽	魏(後)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	中原93.1
8	南陽樊城21号画像石墓	南陽	魏(後)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	中原93.1
9	南陽樊城21号画像石墓	南陽	魏(後)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	中原93.1
10	鄧州樊城21号画像石墓	鄧州	魏(後)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	中原93.1

11	洛陽曹魏正始八年墓	洛陽	247年						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
12	偃師西園村16号魏墓	偃師	曹魏						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
13	洛陽東郊178号魏墓	洛陽	魏(末)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
14	洛陽西郊西晉墓M3005	洛陽	西晉(初)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
15	洛陽西郊西晉墓M3088	洛陽	西晉(中)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
16	洛陽西郊西晉墓M1-27	洛陽	西晉(早)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
17	鞏義石家莊村西晉墓	鞏義	西晉(早)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
18	鞏義西村西晉墓(M40)	鞏義	西晉(中)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
19	洛陽東郊177号西晉墓	洛陽	西晉(中)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
20	洛陽分水西晉墓M6	洛陽	西晉(中)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
21	鞏義北窯村西晉墓(M20)	鞏義	西晉(中)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
22	鞏義茅莊村西晉墓	鞏義	西晉(中)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
23	洛陽市西晉墓M1	洛陽	287年						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
24	洛陽西晉大司農閻中侯墓	洛陽	293年						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
25	洛陽西晉宗室母後孫人墓(M8)	洛陽	299年						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
26	西晉尚書郎命婦孫世簡女墓	洛陽	302年						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
27	洛陽西16工区82号墓	洛陽	西晉(晚)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
28	洛陽分水西晉墓M5	洛陽	西晉(晚)						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
29	洛陽北郊西晉墓	洛陽	西晉						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
30	洛陽分水西晉墓M4	洛陽	西晉						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
31	洛陽東郊西晉墓M20	洛陽	西晉						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584
32	洛陽東郊西晉墓M21	洛陽	西晉						斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	無	無	無	無	無	無	無	無	無	考石584

33	洛陽市西晉墓M52	西晉	斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	東方凸形墓室	9	09	1	無	無	27	3	1.8	1人	學571
34	洛陽孟津山山西晉墓M89	西晉	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	有階及近方凸形墓室	11	2	1	直壁	主室側壁	3	3.1	2.4	不明	考593.1
35	洛陽杏園村34号西晉墓	西晉	斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	有階及近方凸形墓室	22	29	2(1)	直壁	前室後壁	29	29		2棺同室	考585.8
36	鞏州西晉墓	西晉	斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	有階及近方凸形墓室	24	1	1	直壁	前室後壁	34	17	2.4	前室各1	考571.1
37	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	53			直壁	平頂	31	1.4	1.4	1棺1人	中592.2
38	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	7			直壁	平頂	3	2.4	1.7	2棺1人	考591.9
39	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	15	2	不明	直壁	穹窿頂	6.8	6.8	7	2棺同室	考593.3
40	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	40.6	7.9	3(1)	直壁	穹窿頂	54	5.1	2.5	1人	考593.1
41	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	9	2	1	直壁	穹窿頂	4.4	4.4	2.6	2棺同室	考594.9
42	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	78	15	1	直壁	不明	32		3	1棺1人	文591.8
43	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	10.4	2.5	1	天井+直壁	穹窿頂	4.8	4.6		1棺	考593.5
44	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	30	7		天井+直壁	穹窿頂	7.5	7	9.5	不明	文591.12
45	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	27			天井+直壁	穹窿頂	3.3	3.5	3.3	1人	考593.4
46	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	10.4			天井+直壁	穹窿頂	4	3.9		1人	考593.4
47	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	2.3			直壁	拱	5.3	5.5		1人	考593.5
48	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	17.6	1.5	1	直壁	穹窿頂	2.8	3		1棺1人	文593.8
49	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	9	2	2(1)	直壁	拱	4.2	4	3	不明	考593.1
50	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	18.5	1.4	1	直壁	拱	4.5	4.5		不明	考591.9
51	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	8.1	1.6	1	直壁	穹窿頂	4.1	3.7	4	1棺1人	考591.9
52	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	4.4	0.7	1	直壁	不明	1.5	2.2		不明	考592.2
53	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	無	1.8	1	直壁	穹窿頂	2.3	3.5	4.5	不明	中593.2
54	洛陽北魏曹業郭氏墓	北魏	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室				直壁	石椁頂					
55	沁陽東西晉曹所北朝墓	沁陽	斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	東方凸形墓室				直壁	石椁頂					

56	安陽孝民屯十六國墓M154	十六國(早)	斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	東方凸形墓室	2.6	0.9	3.4	直壁	土椁台				1棺1人	考593.6
57	安陽孝民屯十六國墓M165	十六國(早)	斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	東方凸形墓室	2.9	1.3	2.9	直壁	土椁台				1棺1人	考593.6
58	安陽孝民屯十六國墓M195	十六國(早)	斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	東方凸形墓室	2.4	0.8	2	直壁	土椁台				1棺1人	考593.6
59	安陽孝民屯十六國墓M196	十六國(早)	斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	東方凸形墓室	2.6	0.9	2	直壁	土椁台				1棺1人	考593.6
60	安陽孝民屯十六國墓M197	十六國(早)	斜壁墓道積穴磚室墓	素面磚	東方凸形墓室	2.3	0.7	2.4	直壁	土椁台				1棺1人	考593.6
61	安陽北齊曹業郭氏墓	北齊	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	3.6	3.5	2.6	直壁	穹窿頂				2棺同室	中597.1
62	安陽北齊曹業郭氏墓	北齊	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	11.4	0.5	2	直壁	穹窿頂				1棺1人	文597.1
63	安陽北齊曹業郭氏墓	北齊	斜壁墓道積穴土洞墓	素面磚	東方凸形墓室	2.8	0.8	2	直壁	不明				1棺1人	考597.2

注: 3(0, 1)は、3は3列封門施設、(0)は扉のない封門1ヶ所、(1)は扉のある封門1ヶ所の、(1)の1は扉のある封門の数を、以下同じ。

河北省

番号	墳墓名	所在地	時期			埋葬施設形態			墓室施設形態			規模(後章)			葬俗	参考文献					
			三国	西晋	十六国	東晋	南朝	北朝	裝飾墓	形式	前飾室	甬道	封門	天井			墓壁	墓頂	棺床	祭台	長
1	河北井陘區魏晉墓	井陘	魏(末)	西晋				斜椽式磚六磚室墓	前飾室	甬道	封門	天井	墓壁	墓頂	棺床	祭台	2.6	4.5	4.5	1夫2妻同室	考古585
2	河南北魏博陵太守邢儉墓	河南					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明		4.5	4.5		考古594
3	北魏冀州刺史韓暹妻高氏墓	冀州					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古723
4	東魏冀州刺史高澄妻高氏墓	冀州					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古723
5	石家莊東魏司空高澄妻高氏墓	石家莊					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古723
6	冀州東魏冀州刺史高澄墓	冀州					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古776
7	平山北齊同鄉尚書崔暹墓	平山					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古793

8	磁縣東魏南陽郡都督荀羨氏墓	磁縣					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古776
9	磁縣東魏魏郡公主墓	磁縣					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古776
10	磁縣北齊皇室宗族元良墓	磁縣					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古44.4
11	磁縣北齊文宣帝高洋墓	磁縣					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古597.3
12	講武城北齊同鄉北丘尼因墓	磁縣					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古597.3
13	北齊魏郡太守高澄墓	磁縣					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古591.1
14	磁縣北齊文宣王高澄墓	磁縣					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古44.4
15	磁縣講武城北齊墓M56	磁縣					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古793

16	瀋州烏樓北魏墓M1	瀋州					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古54.9
17	瀋州烏樓東魏墓M2	瀋州					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古54.9
18	瀋州烏樓北齊墓M3	瀋州					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古54.9
19	瀋州烏樓北齊墓M4	瀋州					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古54.9
20	瀋州北齊善安郡太守高文貴墓	瀋州					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古54.9

北京市

番号	墳墓名	所在地	時期			埋葬施設形態			墓室施設形態			規模(後章)			葬俗	参考文献					
			三国	西晋	十六国	東晋	南朝	北朝	裝飾墓	形式	前飾室	甬道	封門	天井			墓壁	墓頂	棺床	祭台	長
1	北京大柵村西晋墓M4	北京					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古83.10
2	北京大柵村西晋墓M3	北京					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古83.10
3	北京大柵村西晋墓M2	北京					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古83.10
4	北京大柵村西晋墓M7	北京					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古83.10
5	北京西郊西晋墓M2	北京					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古83.10
6	北京西郊西晋墓M1	北京					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古83.10
7	西晋幽州刺史王浚妻墓	北京					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古64.4
8	北京王府井西晋墓	北京					斜椽式磚六磚室墓						不明	不明	不明	不明					考古512

山东省

番号	墳墓名	所在地	時期			埋葬施設形態			墓室施設形態			規模(後室)			葬俗	参考文献	
			西晋	十六国	南北朝	墓室	形制	封閉	天井	墓壁	墓頂	棺床	祭台	長			幅
1	嘉祥城坊鎮魏晉画像石墓	嘉祥	魏(末)	西晋(初)		羨道	不明		不明			2.4	1.7	1.4	不明	文物865	
2	臨沂金雀山魏晉張氏画像磚墓	臨沂	魏(末)	西晋(初)		羨道	0.8	1	不明			3	1.8	1.0	不明	文物956	
3	臨沂西曹叔休磚墓M1	臨沂	魏(末)	西晋(中)		羨道	0.6	1	不明			3	2.3	2.4	1人	考古85.12	
4	臨沂西曹叔休磚墓M2	臨沂	295年	西晋		羨道	0.6	1	不明			2.6	2.3	2.5	1人	考古85.12	
5	泰山西曹画像石墓	泰山	西晋			羨道	無	無	不明			4.5	4.1	1.7	不明	考古89.8	
6	滕州西曹元康九年石室墓	滕州	298年	西晋		羨道	無	無	不明			5.6	5.4		不明	考古89.12	
7	臨沂崔秋石室墓M15	臨沂				羨道	不明	1(1)	不明			5.8		7.3	2人同室	考古85.3	
8	北魏曹州刺史崔鴻夫塋石室墓	臨沂	492年	北朝		羨道	不明	1(0)	不明			5.8		7.3	2人同室	字號84.2	
9	臨沂北魏濟州刺史崔麟石室墓	臨沂	528年	北朝		羨道	不明	1(0)	不明			5.8		7.3	1人	字號84.2	
10	臨沂東魏魏遠行堂崔混石室墓	臨沂	528年	北朝		羨道	不明	1(0)	不明			3.8		3.8	1人	字號84.2	
11	臨沂北齊崔暹塋石室墓	臨沂	565年	北朝		羨道	2	1(1)	不明			3		3	2人	字號84.2	
12	臨沂北齊崔暹塋石室墓M10	臨沂	572年	北朝		羨道	無	1(1)	不明			3.8		3.8	1人	字號84.2	
13	臨沂北齊崔暹氏石室墓M7	臨沂	北齊	北朝		羨道	無	1(1)	不明			3.8		3.8	1人	字號84.2	
14	臨沂北齊崔暹氏石室墓M7	臨沂	北齊	北朝		羨道	無	1(1)	不明			3.8		3.8	1人	字號84.2	
15	臨沂崔暹氏石室墓M17	臨沂	北朝	北朝		羨道	2.1	1(1)	不明			3.8		3.7	不明	考古85.3	
16	臨沂崔暹氏石室墓M16	臨沂	北朝	北朝		羨道	2.1	1(1)	不明			3.8		3.7	不明	考古85.3	
17	寿光北魏魏東河軍曹思伯墓	寿光	525年	北朝		羨道	不明	不明	不明			4.5		4.5	2人同室	文物92.8	
18	濟南東八里漢北齊石室墓	濟南	北齊初	北朝		羨道	5	0.9	1(0)			3.9		3.4	2.3	不明	文物89.4
19	北齊初阿蘭令道真石室墓	濟南	571年	北朝		羨道	4.5	1.8	1(1)			3.4		3.3	3.2	1人	文物85.10
20	濰州和庄北齊磚石墓	濰州	北齊	北朝		羨道	無	不明	不明			2.6		1.7	4	1人	文物84.12

山西省

番号	墳墓名	所在地	時期		埋葬施設形態				墓室施設形態				規模(後室)			総人数	参考文献				
			三国	西晋	十六国	南朝	北朝	種別	接納墓	形式	墓道	扉道	封門	天井	墓壁			墓頂	棺床	祭台	墓幅
1	大同南郊北魏墓M235	大同																2.3	0.6	1.7	文物928
2	大同南郊北魏墓M81	大同																2.3	0.8		文物928
3	大同南郊北魏墓M109	大同																2.8	1.6		文物928
4	大同南郊北魏墓M112	大同																			文物928
5	大同南郊北魏墓M79	大同																			文物928
6	大同南郊北魏墓M79	大同																2.2	1.6		文物928
7	大同北魏魏王司马金龙墓	大同																6.1	6	5.2	文物773
8	大同北魏太子元暉墓	大同																6.4	6.8	7.3	文物787
9	大同北魏李艾布万年墓	大同																5.7	5.7	7	文物787
10	大同北魏汾州刺史封和突墓	大同																4.6	4.4		文物838
11	大同北魏三州刺史元淑墓	大同																5.7	6.8	7	文物838
12	太原北魏南青州刺史辛祥墓	太原																3.9	4	3.1	考古集刊1
13	并州北齐明太子唐狄烟浴墓	并州																5.4	5.4	4.6	考古集刊1
14	和州北齐慕容绍宗墓	和州																4.5	4.5	5.1	文物793
15	太原北齐慕容绍宗墓	太原																5.7	5.7	6.6	文物754
16	太原南郊北齐慕容绍宗墓	太原																2.7	2.7	3.2	文物80.12
17	晋城十里铺西魏墓	晋城																3.6	3.5	3.9	中條堂各1人
18	曲沃董村北魏李韶墓	曲沃																2.7	2.8		考古99.1